朴景利（パク・キョンニ）先生の『土地』を媒介にして

友愛と歓待の友になることを願って

こんにちは。私は「河東土地26研究会」の準会員、カンスドルと申します。河東には既に3年間暮らしております。

その前は25年間、高麗大学の経営学部で研究と教育に従事しておりました。主に労働の歴史、労働市場、労働法、人間関係、企業と社会といった、利益に直結しない分野を専門としておりました。いわゆる非主流の経済学者であり、金銭的な利益よりも日々の生活を重視しています。このことが皆様に私を紹介する助けになれば幸いです。このように直接的に自己紹介をする理由は、皆様も利益にならない大作、「土地」を愛しておられるからです。

正直に申し上げますと、この忙しい現代社会で生存することも一苦労で、まだ「土地」を最後まで読み終えておりません。最近になってようやく真剣に読み始めたところです。早期退職後に河東での生活を始めてから3年が経過しましたが、未だに「土地」の序盤で足踏みしています。多くの登場人物たちの関係を理解することが、頭を悩ませる原因となっています。現代は確かに忙しい世の中で、利益にならない本は読書の優先順位でも後回しにされがちです。

しかし、カンソンホ先生から皆様の話を伺った昨年11月初旬のイベント（河東土地26研究会の第2回発表会）を機に、「土地」を本格的に読み進めるようになりました。いつか皆様とお会いできる日には、ほぼ読み終えていることを願っております。

このように私はまだ「土地」の初心者ではありますが、朴景利先生とその作品全般に深い愛情を持っています。日本でこの本が完全に翻訳されたというニュースは大変嬉しく、長い間苦労された出版社の関係者、スポンサー、翻訳者、そして読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

まず、カン先生が翻訳してくださった、2024年10月の統営記念会に参加された大塚慶子様の手紙について触れたいと思います。2016年1月にク

オン出版社が主催した「文学で旅する韓国統営編」に初めて参加されたというお話を伺い、本当に「土地」と朴景利先生の生命思想を愛する方だと感じました。そして「土地」の日本語版完結後の**2024**年**10**月に再び韓国を訪れる「二日前に」**20**巻全てを読み終えたというのは、非常にドラマティックでした。

そのほどまでに切実に「土地」を愛していると感じ、大いに共感しました。特に、小説の終盤に登場する日本の敗戦の状況や、徴兵を逃れて山に逃げる人々、食糧難に苦しむ人々の話には「息苦しさを感じた」との大塚様の言葉に、単なる小説としてではなく、小説の中の人々とその生活に深く入り込んでいらっしゃると感じました。

朝鮮半島に渡った日本人の行動、日本に渡った朝鮮人に対する態度などを読んで、恥ずかしさと心の痛み、苦しみを感じることが度々あったというお言葉には、大塚様だけでなく、日本の読者や私を含む「河東土地**26**研究会」のメンバーも同じ気持ちだと思います。そして、「この全ての事実を見逃さずに直視し、決して忘れてはならない歴史だと強く感じた」という言葉には、自然に感動しました。

私はこのような心、そして心が繋がった人々が、歴史と社会の真の主人公だと考えます。もちろん、資本と権力の力は現実的に非常に強力ですが、これら普通の人々の心とその心が繋がった人間のネットワークが資本と権力に立ち向かうのは困難であり、さらに勝利するのはさらに難しいこともよく理解しています。しかし、よく考えてみれば、資本も、権力も、すべて人間が作るものではないでしょうか？

そのために、平凡な私たちが増え、そのような心の交流が増えれば、いつかこの心の種が爆発的に花を咲かせ、全世界をより平和で活気に満ちたものにすることができると信じています。容易ではありませんが、この原理が正しいことに疑いはありません。それが私たちの力です。

そして、そのような態度で生きることが、大塚様がおっしゃった朴景利先生の「生きることは美しい、そして哀れだ」という言葉を少し変えて、「生きることは哀れだが、それにもかかわらず美しい」と私なりに表現できると思います。これはまた、大塚様の「悩み、苦しみ、傷つきながらも、それでもなお頑張って生きることは尊い」という言葉とも通じると思います。

ですから、いつか河東と東京の「土地読書会」のメンバーが互いに会えることを心から願っています。そして、「土地」に登場する歴史や社会に関する話を広く共有することを期待しています。さらに、そのような出会いを通じて、現代を生きる私たち一人一人の人生、考え、感情、価値観などを率直に共有し、お互いに親密な関係を築くことができればと願っています。そうすれば、私たちが経験するさまざまな人生の苦痛を互いに慰め、励まし合い、友情を築くことができるでしょう。そうなれば、天にいる朴景利先生も本当に喜ばれると信じています。朴先生もこんな風に言われるかもしれません。「私がなんと**26**年もの間、目が落ちるほど『土地』を書き続けたけれど、やはりよくやった」と。

大塚様、心を込めて書いてくださった手紙、本当にありがとうございます。筆跡もとても美しいですが、内容がさらに素晴らしかったです。

そして、これからは山岡幹郎様にお言葉を申し上げます。まず、山岡様のお母様が**1925**年生まれ、お父様が**1916**年生まれで朴景利先生と同じ世代というお話に目を引かれます。実は、故人である私の母も朴景利先生と同じ**1926**年生まれで、父は**1919**年生まれでした。ですから、山岡様と私も似た世代（おそらく私が弟並み）ではないかと思い、なおさら嬉しいのです。（ちなみに、私は**1961**年生まれです。母が「思いもよらなかったけれど」私が必死に「生まれようともがいて」世に出た遅れてきた子です。今の私は、どんなにこの世が厳しくとも「やはり生まれてよかった」と感じています。）

山岡様が「早くから植民地主義や軍国主義に加担した日本の歴史や社会をどう捉えるか？」という問いを投げかけたことは、決して一人だけの問題ではないでしょう。また、それは過ぎ去った過去だけの問題ではありません。痛くて悲しく、苦しい歴史ですが、記憶し、また記憶すべき歴史です。しかし、誰もが後悔や罪悪感、そして被害意識や復讐心に囚われるべきではない、私たち全員の問題です。なぜなら（日本も韓国も問わず）今日の資本と権力もまた、過去の植民地主義や軍国主義と形は異なるかもしれませんが、さまざまな形で世界を、そして世界の人々の生活を破壊しているからです。このことに目を向ける勇気があるならば、まだ世界には希望があると信じます。

この部分で山岡様の、「東学農民戦争から**1945**年**8**月までの歴史を描きながら朴景利は韓国の次世代にメッセージを送っている」とのお言葉が非常に貴重に感じられます。その通りです。私もそう思います。それでは一体朴景利先生のメッセージは何か、それがもし私たちが出会えたら、お互いに真剣に話し合うことができるテーマだと思います。

山岡様は「（朴景利）作家の批判に日本の読者はどう応じるか、それが問題」とおっしゃいましたが、私はその応答責任が日本の読者だけにあるとは思いません。そのような批判や質問に応える責任は韓国の読者にもあることはもちろん、『土地』を読みながら人と人の関係、人と自然の関係、個人と社会の関係を考えるこの世界中のすべての人々が「自分のことのように」考えるべき問題だと思います。そうすれば、子孫たちにとってこの世界がより住みやすい場所になると確信しています。

山岡様が後半にメモしてくださった、（**1**）女性史としての『土地』、（**2**）思想史、運動史としての『土地』、（**3**）『土地』執筆時期と韓国政治動向などのさまざまなテーマは非常に興味深く、意義が大きいと思います。ただ、まだ『土地』の「初心者」の読者である私としては、これらのテーマに一つ一つ答えることに努力するのは本当に「出過ぎた真似」と思います。後ほどゆっくり一緒に考えてみたいと思います。

もちろん、それ以外にも共有したい話題はたくさんあると思います。私たち全員の寿命（人生）がこの重要なテーマと誠実な人生の話をすべて十分に分け合っていけるほど長ければどんなにいいでしょうか、と思うほどです。この面で、私たちがもう少し早く会えなかったのは非常に残念です。まるで『土地』の中でユインシルと岡田二郎が恋愛関係を続けることができなかった場面で私たちが感じるようなそのような残念さが込み上げてきます。

それでも、今日の私たち（韓国と日本の『土地』読書会のメンバー）は間もなく心温まる気持ちで互いに会えるでしょうから、胸の熱いときめきと喜びの感情でこの手紙を結びたいと思います。お忙しい中、良い手紙を送ってくださった大塚慶様と山岡幹郎様、そしてこのように日韓間の民間友好の橋となってくださった出版社クオンの金承福様や翻訳者の吉川凪

様、清水知佐子様にも感謝と敬意を表します。笑顔で会うその日まで、どうかお元気でお過ごしください。

2024年**12**月**24**日、不思議なほど温かくて心地良い冬に

河東から、カンスドル 拝